

イントロダクション

今日の生命科学の最大の未解決問題が脊椎動物の進化のしくみとところのオリジンとなる臓器が何かの謎です。私は三木成夫先生の「生体力学と重力作用に基づいた生命の形態学」を22歳の頃に学び強い衝撃を受けて以来このかた、「頭進」ということばから重力に基づく慣性の法則性にめざめ、これが進化という複雑な現象の背後に潜む摂理であることを感得したのでした。それから20年も経過して不惑を過ぎた頃に三木バイオメカニクスを発展させてセメント質と歯根膜とソケット骨を持つハイブリッド型の人工歯根を世界に先がけて開発しました。

昭和60(1985)年頃に骨と歯の鉱物質のヒドロキシアパタイトが合成された段階で、これを用いて種々の材質と形状の人工歯根を作製し、成犬の顎に植立して咬合のゆすぶり機能(生体力学エネルギー)を負荷したものと安静状態のものとを比較するなどの、一連の動物実験を開始しました。こうして僅かの期間に人工的に歯根膜とセメント芽細胞と固有歯槽骨の誘導に成功したのでした。

次いで人工関節骨髄チャンバーをアパタイト多孔焼結体を用いて開発し、筋肉内に植立して血流の流体力学エネルギーによって骨髄造血組織の誘導にも成功しました。これらの研究から、進化の第三革命の哺乳動物の誕生で生ずる釘植歯(哺乳動物の異型性歯)と関節骨骨髄造血発生を究明しました。これにより進化の第二革命の脊椎動物の海から陸への上陸劇が、重力作用の6倍化に対する動物の生体力学対応で起こることを世界に先がけて明示したのでした。

これらのバイオセラミクスと生体力学エネルギーによる複合型の人工器官の開発により、進化が重力に基づく生体力学エネルギーによって起こることを多角的に検証しました。この考えを発展させて進化の異なるステージの動物に生体活性セラミクスを植立し、生体力学刺激を加えて進化のステージをアップさせるというこれまでに誰一人として思いつくことも想像することも出来なかった実験進化学手法も確立しました。

これらの研究成果をふまえて、さらに深く考えて、これらをまとめて「顔の科学」「内臓が生み出す心」を著わしました。これらはすべて三木先生にならって脊椎動物の重力進化学とそれに基づく人類のみに特有の構造的欠陥で生ずる「口呼吸」等に着目した視点から書かれたものです。15年目を迎えた西原研究所も一段落した段階で、まほろばセミナー「やまとことばで現代科学(医学と量子物理学)の謎を解く」をはじめることとしました。

こうしてこれらを以下のごとく四本の柱にまとめることとしました。